

CIEC 第77回研究会 報告

テーマ：子どもたちの『情報』能力育成に向けて
(大分大学 社会人の学び直し GP 講演会 2008)

日時：2008年10月18日(土) 13:30～16:30

会場：(社)大分県労働福祉会館ソレイユ3階牡丹

参加：40名

主催：大分大学 『情報教育イノベータ』養成教育プログラム推進委員会

共催：CIEC (コンピュータ利用教育協議会)

後援：大分県教育委員会、(財)ハイパーネットワーク社会研究所

総合司会：山下 茂 氏 (大分大学) / シンポジウム司会：立田 ルミ 氏 (獨協大学・CIEC)

1. 講演会 13:30～14:45

演 題『ICTで授業をどう作るか、どう注意すべきか』

講 師 国立大学法人 東京工業大学 赤堀 侃司 教授

2. 休憩 (15分)

3. パネルディスカッション 15:00～16:30

『ICTの活用で子どもはどう変わってくるのか』

パネリスト

上野 真 氏 (大分市立滝尾小学校)

平田 義隆 氏(京都女子大学・中学高校)

コメンテーター

赤堀 侃司 氏 (東京工業大学)

大岩 幸太郎 氏 (大分大学・CIEC)

今回の研究会は、大分大学が主催する「大分県における教育の情報化のための『情報教育イノベータ』育成プログラムの開発」のための講演会およびシンポジウムを、CIEC との共催で行い、まず、赤堀 侃司 氏 (東京工業大学)に、『ICTで授業をどう作るか、どう注意すべきか』とのテーマで講演をお願いした。

赤堀 侃司 氏は、最初に、今日に至るまでの ICT を利用した教育の流れを簡単に概観され、教育にコンピュータ、次いでインターネットが取り入れられた時の大きな変化について述べられたが、特にインターネットからは様々な情報が得られるため、情報をどう扱い、道具としていかに利用し、情報を活用する人間の育成が重要であると位置づけられた。

ICT を活用した授業で大切なことは、情報の提示であり、これまで、多くの国々の教育の様子を視察を通して、フィンランドであろうと、シンガポールであろうと中国であろうと、授業の基本は、情報の提示であり、教室には情報を提示できるプロジェクトが必要であると指摘された。

氏によれば、大学院などの授業では、可能な限り、最新の論文や情報を使った授業を行い、最近の2～3年以内に発表された論文を利用され、IDとパスワードの認証によって閲覧できる授業用のWebサイトに掲載し、各自がそこにアクセスして、予習をしてくる仕組みで行っており、これ以外に方法があまりなく、世界的に見ても同様の傾向であるとのことであった。

更に、以前はパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを利用して大学院の授業を行っていたが、それ



は、ある問題に対する自分の考えを単に学生に伝えたに過ぎないとも言えたとされた。したがって、論文そのものなどの、1次情報を提示することで、たとえば、ある目的から方法、結論にいたるまでの論文に対して、大学院生が直接関わり合うことができるようになった。

講義や授業で教えるのではなく、勉強をして来てもらうということが重要で、各自が、勉強をして、授業に臨み、授業の中では、ディスカッションを行い、教えることから議論することへの方向にだんだん転換しているように思われるとのことである。

次に、学部の授業について紹介された。たとえば、授業に必要な資料をあらかじめ提示し、学生は、それを自分で印刷する。印刷する行為であっても、授業を聞く姿勢ができる。実際の授業の時には、学生は、手元に資料があり、教員は、同じものをプロジェクタで映す。手元に同じものがあることがきわめて重要である。なぜなら、先生の言うことはよくわからないのは、どこの説明をしているかわからないためだからである。一番重要なことは、テキストが手元にあって、今どこを話しているかをプロジェクタで大きく提示しながら指示し、アンダーラインなどを付けることである。情報の提示で重要なことは、できるだけ学生・生徒のところにある内容と映す内容が同じであることで、異なることはそれが障害となって学習が進みにくいとのことである。

小学校でも同様に、授業についてこられない生徒の場合、生徒の手元にある内容と、黒板に書いてある内容と、先生が言っている内容がすべて同期せず、すべてが異なると、負荷が生じることによって授業についていけなくなる。

また、ある説明をしている場合に、その説明をしている部分に印をつけるツールがいくつか存在するが、印を付けたときと付けないときで全く理解度が異なるとの報告もあり、このようなことは、情報提示においては、最も基本的なことだが、なかなか行われていないのが現状であるとのことであった。

更に、大学でないと通用しないかもしれないが、多人数の授業において、出席をとるために携帯を使用している。朝の一時間目の授業で最も人気のない時間帯であるが、携帯を利用して出席をとった学生それぞれの名前をプロジェクタで写し、そこに自分の名前が出ることで意欲が上がり、多くに学生が意欲的に取り組んでいる事例を紹介された。

ただ、現在の教育再生会議などでは、小中学生には、「ケータイを持たせるな」との議論が主流となっているため、この事例は、小中高等学校への応用が、なかなか難しいと考えられる。しかし、すべての道具には、必ず良い面と悪い面がある。ケータイは、既に日本中、世界中に広く普及しているため、なくなるはずはない。誤った使い方によっては、とんでもないことになるが、もう一方では、非常に有益な便利な使い方も多いことは事実である。したがって、いかに正しく利用するかを教育の中から考え、正しい利用方法を共通に考えていくことが大切である。そうでなければ、教育とツールとの関わりは論じることさえできないと思うが、小中学校では、現段階ではケータイを禁止することは構わない。たとえ禁止しても、禁止するだけではなく、有効な使い方を常に模索することを是非行って欲しいと話された。

また、最近の国際会議での報告で、過食症が増えている小学生が多く通うスペインの小学校の先生の発表の事例から、インターネットを利用して、自分がどのように過食症になったか、あるいは、自分がいかに過食症を克服したかなどを互いに書き込むことで、子ども同士がコミュニケーションをとりながら過食症を減らしたという例を紹介された。

日本では、インターネットの世界に対する考え方として、たとえば、情報モラルについて、モラルがなくなったからモラルをきちんと教えて防ごうという考え方が主流であろう。自分たちがそのようななってしまった理由をインターネットが悪いということではなく、インターネットを逆に利用し、コミュニケーションをしながら、よく知ることで、過食症というものをコントロールできるのではないかという発想である。

道具そのものに善し悪しはなく、このように利用すれば過食症になる。別の使い方をすれば、過食症を防げるかもしれない。メディアと教育の関係としては、既に教育に取り入れられているメディアをどのように受け止めるか、いかに利用するかが今求められている。ケータイも同じではないだろうかとされた。

たとえば、100名の受講生のいる授業で、自由に発言や質問ができるだろうかと疑問を投げかけられ、学生はすばらしいアイデアを持っていたとしても、100名の中で、手を挙げられるのは、よほど自信がある場合などではないだろうか。日本の社会では、手を挙げて発言した場合に、周囲の視線を気にする。このような社会の中で、挙手をして何らかの行動を起こすことは、バリアの高いことであるのではないか。しかし、ケータイで、質問を

出すような仕組みにすることで、ある種の匿名性により、すばらしい質問も多く出てくるようになり、これを重ねることによって、次第に、ケータイを利用しなくても質問などが出てくるようになる。基本は、一人一人とインタラクティブにやりとりをすることが必要だが、大人数の場合にはきわめて難しい。そのための手段としても考えられると思うとのことであった。

道具はきっかけである。よく心配されることは、道具を使うと道具に依存するではないかということ。確かにそのような面もある。しかし、それをきっかけと考えたらどうか。この考えには反対の人も多いが、たとえば、ICTを薬だと考える。この世の中には健康な人ばかりがいるわけではなく、誰もが風邪をひいたら薬を飲む。少しの薬の助けによって、気分はよくなる。同様にケータイの助けによって、自分の意見を言ってみよう。薬がなくなっても健康体になれるかもしれない。すべての人々が健康体であれば、全く何の問題もなく、ICTなどを利用する必要もないということである。

次に、電子黒板の利用に言及された。電子黒板では、子どもが、跳び箱やマット運動をする様子をデジタルビデオで撮影し、運動を終えた数十秒後には自分の姿を見ることができる。また、倒立したときの角度などを書き込めることなどはすばらしく、書き込めることが非常に重要で、電子黒板の一番の良さは、映すことではなく、そこに書き込めるということであり、最近、非常に注目されている。

最近の論文の事例で、小説を読むときにはアンダーラインを引かない。小説を読むときは楽しんでいるだけである。しかし、学習はこれとは異なり、単に脳を意味もなく右から左にすり抜けていってしまっただけでは意味がない。人は、重要と考える内容などをメモしたり、アンダーラインを引いたり、○をつけたり、印をつけたりということを行う。たとえば、教科書を読んだときに、「ここがわからない、ここが重要だ。」というようにテキストと自分の脳が対話をしていると感じられること、対話しながら理解を進めていることが重要で、それをなんらかの形で表現するのがアンダーラインなどではないかとのことである。

更に最近の研究として、文部科学省の委託を受け、北海道の学校から種子島の学校に至るまで、小学校6校、中学校5校、高等学校1校の合計全国13の小中高等学校に「ニンテンドーDS」を貸し出して学習成果を調査された成果を中心に話していただいた。630台のDSを利用して調査をしたところ、朝学習に利用することは、非常に効果あるとの結果を得られたとのことであった。

その研究では、成績の優れている生徒とそうでない生徒の一番の差は、休憩時間などのきわめて短い時間をいかに活用するかということも重要な要因であり、習熟度に対応できることもコンピュータの特性である。また、朝学習を行うことで、学習の構えができ1時間目の授業に入りやすくなるとの効果もあったとのこと。

また、あらゆる面で基礎学力は必要であり、たとえば、ある文章の60%以上の単語がわからなければ、文章を読むという持続性は無理である。したがって、基本的な単語を覚えさせないと授業は成立しない訳である。DSは、使える道具だということが判明したが、問題は持続性で、脳科学的なアプローチも試み、前頭葉について調べた結果、個人差はあるもののDSを使って学習したグループはそうでないグループに比較して集中して学習しているとのことである。

課題は、飽きること。どんなメディアを使っても必ず飽きてしまう。DSでもプリントでも様々なメディアでも同様であり、脳の血流量を測定すると、新しいメディアの方が必ず最初は、脳が活性化するが、いつか飽きてくる。つまり、前頭前野の活動が活性化しなくなる。それは、道具が良くないと考える方もいるが、飽きてやらなくなる生徒と習慣化される生徒がいることがわかった。習慣化される生徒は、非常に伸びる。前頭葉は活性化されていないけれども習慣化される。習慣化されて、持続する生徒は、非常に伸びるとのことであった。

次に、『ICTの活用で子どもはどう変わってくるのか』とのテーマで立田 ルミ氏の司会により、パネルディスカッションが行われた。最初のパネリストとして、上野 真氏（大分市立滝尾小学校）から、話題提供をしていただいた。

上野 真氏は、「子どもが楽しい、自分も楽しいICT活用」と題して、普段している実践と、そこでの子どもの様子を中心に報告された。現在、学校現場では、「IT新改革戦略」に基づいて、「教員のIT指導力の評価等により、教員のIT活用能力を向上させる」ことに取り組んでいるとのこと。この報告では、ご自身の日常的なICT活用方法や、「自分も楽しい！」と思えた活用と、計画的な活用方法では、授業実践や研究授業等での実践を中心に話していただいた。

まず、小学校の教室における ICT 環境は非常に厳しいため、自費で、実物投影機能のあるマルチプロジェクタとホワイトボードの機能がある黒板に貼れるマグネットスクリーンを購入され、日常的な ICT 活用方法の一つとして、「学級開きの自己紹介」「漢字テストの結果発表」「学級の思い出スライド」などを行い、学級経営にほんの少しの潤いを出されているとのことであった。

「学級開きの自己紹介」では、子どもたちといかに信頼関係を作るか、子どもにいかに安心してもらうかが非常に重要であるので、ICT を活用し、プロジェクタを利用して、おもしろく自己紹介を行うことで、信頼関係を築くことができると考えていると紹介された。

「漢字テストの結果発表」では、あいにく DS がいないため、紙での漢字テストを行っているが、子どもたちの意欲を高めるために、結果発表をプロジェクタ利用で行われているそうである。具体的には、前のテストからどれだけ成績が上がったかを本人の同意を得て載せ、漢字が苦手な子どもほど、がんばるので、名前が載る可能性が多く、見せることで拍手がおきる。もちろん満点だった場合にも連続チャレンジャーということで見せる。更に、クラスの目標点を最初に決めておいて、これをみんなががんばって超えたら達成パーティーをしようということをする。合計点の出し方にも工夫をしている。自分の名前が載ることや、達成したときには、うれしいようで、子どもたちは漢字テストが非常に好きとのことであった。

「学級の思い出スライド」の場合は、子どもたちから、学級の思い出スライドのようなものを作りたいと言い出し、作成することとなり、普段から撮りためてある何百枚も写真から、子どもたちが自ら選び、みんなの顔を並べて4月から順に作成して、自分たちで作詞をした歌を歌いながら終わるということを行われたとのこと。

このように、学級のはじめと終わりにこのようなものを少し入れるだけで、子どもたちとの良い繋がりができるのではないかと感じ、ほんの少しの ICT 活用であるが、伝えたい思い、子どもたちが伝えたい思いを伝えやすくする。わかりやすくする。このような暖かさが ICT にはあるのではと思うとまとめられた。

更に、自分も「楽しい！」と思えた活用事例として、基礎基本の定着を目指して日常的な授業実践とのことで、授業に必要なプリントや提示資料を作成するために、ワープロソフトやプレゼンテーションソフトなどを活用することを紹介された。

基礎基本の定着（国語）として、漢字テストでは、エクセルを利用して、年々改良を加え、データに漢字を打ち込むと、漢字テストができ、下のほうに解答もついているものを生成し、印刷ボタンを押せば、自動的に次々と漢字テストを作成できるマクロを作成されているとのこと。また、読みと漢字が結びついていない子どもには、そのデータを用いて「読みフラッシュ」をすることで、自然に読みが出来るようになったそうである。更に、読み50音テスト、50問は多いので覚えきれないという子どもには、10問テストを繰り返すようにきめ細かく対応されているとのことであった。

このような取り組みによって子どもたちが、自信を持って漢字の学習に取り組むことになり、前述の「漢字テストの結果発表」が楽しみになってくる。また、このようなエクセルのファイルもセキュリティに配慮しながら教材のサーバや USB メモリなどに入れておいて、多くの先生方に活用してもらいようにしているとのことである。

基礎基本の定着（算数）では、学校現場でよく見られるのは、FAX 問題集をコピーして印刷するというところであるが、問題数が少ないことが欠点であるので、ランダム関数によって毎回数字が自動的に変化し、作るたびに異なる問題が生成されるものを作成されたとのことである。

学習に対する児童の興味・関心を高めるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する実践例としては、4年生の地理において、都道府県名も覚えてもらうために都道府県パズルを行い、盛り上がり、その後、通常授業に入るといった方法をとられたとのこと。

また、算数でも ICT をよく使うものの、授業の中では、あまり使用せず、導入とまとめに使い、たとえば、大きな数のまとめに、どうしても大きな数が読めない子どもがいた場合には、大きな定規を用意して目盛りも一緒に数えながら考える。わからない子どもが前に来て、指を指すと一緒に同時に変化させていくようにすることで、

その子も一緒になって活動ができる。手元にあるのと一緒ということは重要で、たとえば、2年生の算数において、算数セットをデジカメで撮影して、その画像を手元の算数セットと同様に動かせるようにして、数を数えるように工夫されているとのこと。

理科では、教科書には一般的な河川の記述があるが、子どもたちの身近なもので、大分川と大分市のハザードマップを元にして、教科書に記述されている洪水などというものが自分たちの身近なところで起こりうることを理解してもらうようにしているとのこと。このようにICTは楽しい授業作りを助けてくれると思うと話された。

また、現在、「デジタル掛図」が、大分市内の小学校にすべて導入され、大分市内の先生方には是非使っていて、広めたいと考えられているとのこと。実践事例としては、少年自然の家で源流探検において源流を見学したものの、上流から下流までをすべて観察するのは難しい場合などの利用例を示され、このような場合には、思考力、判断力、表現力等の育成のための学習活動が行われ、授業を分析・評価し、論述することができたとのことである。

ICTは、万能のツールではないが、授業に「躍動感」と「わかりやすさ」を加えてくれるものであり、また、ICTには、あたたかさがある。このあたたかさによって、子どもたちは、安心して自分の力を発揮できる場となる。楽しい授業になれば、学習意欲の向上や学習習慣が確立され、わかる授業を実現することで、基礎的な知識・技能の習慣ができる。楽しい授業になり、わかる授業ができれば、子どもたちが面白くなる。そのような現場を見ることで、教師自身も更にICTを活用したいと考えることがICTの活用だと思いとまとめられた。

次に、平田 義隆氏（京都女子中学校高等学校）から、「中学校数学におけるICTを活用した授業の試み」と題して、話題提供をしていただいた。2007年度中学2年生の授業において、ICTを活用した数学の授業の展開において、その試みの内容や生徒の反応、成功例や失敗例など交えながら1年間の授業について報告された。

教室の設備については、校舎が非常に古く、黒板に磁石が付かないため、試行錯誤の結果、「貼ってはがせるホワイトボード」を利用されたとのこと。パソコンについては、自前のB5サイズのものを用意して、授業ごとに教室に持ち運んで使用されたとのことであるが、ICTを活用することで、これまでの授業運営と非常に大きく変化した点をいくつか紹介された。

毎回の授業で、授業の導入部分において、5分程度の「フラッシュ暗算」を行われとのこと。この目的は、いまから数学の授業が始まることに対する意欲付けであったが、授業のはじめ生徒たちが必ず黒板の方を向いて授業に望む姿勢ができるので、とても役立ったと感じられているとのことであった。生徒による授業評価においても、非常によい評価を得たとのことであった。

また、PowerPointのスライドのページをめくるために「ワイヤレスマウス」を用いた結果、授業についていくのが困難な生徒やプリントに書き込みをするのが遅い生徒などに付き添いながら授業を進めることができ、これまでよりも、多くの生徒に目を向けることができたとのこと。これまで、なかなか数学の授業では、難しいと思っていた机間巡視が、ICT機器の利用によって実現したことは、授業そのもののとらえ方を大きく変えるものであったとのことである。

また、別の観点では、黒板で授業をする場合、チョークの色に制限がある（白、赤、黄、青）が、PowerPointのスライドを用いることによって、これ以外の色を使用し、よりわかりやすく伝えることができた結果、理解度を上げるのに大きな効果を発揮したのではないかと感じられているとのこと。

更に、図形分野については、スクリーン上で様々な図形を動かし、板書するには若干困難な図形であっても、わかりやすく移動させることもでき、わかりやすいように色を加えることも容易であることから、PowerPointのスライドの制作には多少時間がかかるものの、生徒たちの反応を見る限り、ICTを用いて授業を行う価値はあったように思われたとのこと。

また、ICTを活用した授業を行ったにもかかわらず、効果が出ず、利用しない方がよかった点がいくつかあることを紹介された。

一つには、これまで、基本的に教室でICT機器を使用した授業を行っていない学校であり、特に、数学でこのような形態で授業を行うことが非常に珍しいために、使い始めた当初は、授業の内容はそっこのので、ICTを用いて授業をしていくこと自体に生徒がワクワク・ソワソワで、集中もできない状態が続いてしまったとのことであった。

また、もう一つは、ICTを活用する授業を展開し始めてから、生徒の成績が下がってしまったとのことで、1学期から2学期中間考査までICT機器を使用して授業を展開してきたが、思うように成績が上がらないために、2学期後半は、ICT機器を封印し、これらを一切使わない授業を約2ヶ月間実施したところ、2学期期末テストでは、以前よりやや良いぐらいのレベルにまで回復したとのことである。

これらの結果は、一見、ICT機器を使用しない方が良いかのようにも思われるが、生徒たちによる評価によれば、通常の授業と比較して、興味関心、楽しさ、内容や説明・授業のポイントのわかりやすさのすべてについて9割以上の生徒が肯定的にとらえているものの、7割強の生徒が「分量が多く進んだ」と感じており、実際はそうでもないにもかかわらず、そう感じているということが分かった。難易度については難しく感じた生徒と、易しく感じた生徒がほぼ半々であったが、「得意になったような気がする」と答えた生徒や「いつもより理解できた」と答えている生徒が7割以上いたと話された。

ICTを活用した授業では、準備をすればするほど、授業がスムーズに進み、生徒たちはそれを進度が速くなったととらえているが、逆に、理解度等については非常に高い評価があり、先ほどの、「試験の点数が上がらない」とことと合わせて考えると、単によく分かったような気になっているだけではないかと思われると分析された。

今回、この授業を行ったクラスは、文型の生徒が大半で、こういった生徒たちへの数学教育に必要なことは、「基礎学力の定着」であると考えられているとのこと。具体的には、「授業を理解させること」と「その理解を持続させること」であると思われ、ICTを活用した授業で前者については大きく意識していたと思うが、後者については少しおろそかにしていたのではないかと感じられているとのことであった。

今回のICTを活用しながら授業を構築していく中で、これまでの授業形態や授業そのもののあり方を見つめ直す大きなきっかけとなり、この結果を踏まえて、本当に分からせることをもう一步踏み込んで考えなければならぬと感じられたと報告された。

以上の話題提供に関して、次のようなディスカッションが行われた。

はじめに、ディスカッションから参加した大岩幸太郎氏より、4枚のショベルカーの起承転結画像が提示され、「これで何を言っているか分かりますか」との質問があった。(会場の参加者の多くには不明だった。)氏は、提示内容を工夫することで、児童・生徒の能動的な思考力を求めることも出来ることを示したかった。

ICT利用による動機付けや学習効果と成績との関連について、プレゼンテーションソフトウェアの利用では、学生は、理解できたような気になり、逆に学力が低下することは、確かに指摘されているが、理解できた気になることも重要であり、また、定着するためには、反復練習も必要かもしれないとの意見に対して、



上野氏より、わかった気になるのは、良いことではないかと考えている。しかし、そのまま授業を進めるのではなく、実際の実践では、導入部分にICTを活用し、子どもたちが関心を持つ部分で終わらせた後通常の授業を行っている。ただ、授業に必要な部分的な画像やアニメーションについては、別に考えてられているとのことであった。また、反復練習は、必ず必要であるので、紙ベースで欠かさず一緒にやっていくように心がけていると回答された。

また、平田氏より、中学校や高等学校の場合、特に「特別進学クラス」などにおいては、結果として、成績が偏差値に表れるため、ICTの活用がまだまだ難しい面もあり、授業と関連する宿題をこまめに行わせることで効果が出るとのこと。ICTの活用は、導入の部分には非常に有効だと考えているので、そこで使うようにしているとのことであった。

また、学生が、主体的に授業の場で自ら考えることの授業を実現することが大切に思える。考えることや考えを深めるとことを一緒に経験できるとおもしろい授業になり、自分で、またやってみようと思うようになる。その結果、自分が違ってくることで、「学び」や「勉強のおもしろさ」を感じられるとよいと思っているなどの意見が出された。

次に、学校現場には、子どもが理解できない場合には、子どもが悪いという先生もいるし、大学においても、教員の教え方の問題ではなく、学生のレベル下がってきていると簡単に言うてしまう場合がある。当然のことかもしれないが、基本的な姿勢として、成績が伸びないのは、自分のやり方に問題があるという考え方について、詳しく話して欲しいとの意見が出された。

この意見に関して、上野氏より、ほとんどの先生がそうであるが、子どもの力が伸びたときには、子どもの力であると考え、子どもがうまく伸びないときには、先生にも問題があった、責任だと思わなければならないと思うようになりたいと心がけられているとのこと。何か子どもたちにできないことがあれば、子どもたちに聞き、良くない部分について、解決策を探るように努めることが大切であり、特に小学校の段階では、有効なのではないかと考えられているとのことであった。

また、平田氏より、最近では、以前と比較して、できなくなっていることが多いと感じている。たとえば、大学において、高等学校の教科「情報」の教員免許に必要な科目として「情報科教育法」の授業を担当しているが、コンピュータ教室で講義をした場合には、授業支援システムのモニタなどから、授業中に学生が勝手にmixiなどにアクセスしている様子を観察できる。しかし、コンピュータのない小さい教室でプロジェクタを利用して、授業を行ったところ、よく聞くようになった。決して、悪気があってしているのではないのがわかる。目の前に非常に興味のあるもの置かれて、触れないと言われても子どもはがまんできないのと同じではないかと思う。最近の学生は、以前より、子どもだと感じていので、その年代に応じた学習環境を考える必要があるのではないかと話された。

また、この後、ICTを使った授業をということで取り組んでいる学校もあるが、必要なハードウェアが整備されていない。以前は、情報機器を使えばよいということが言われた部分もあったが、最近では、誰もが利用できて、効果があるものを見極めていこうという動きが多くなってきている。使用できる機器、みんなが共有できる仕組みなども含めて何もかも不足しているのが現状であるので、これを変えていく必要があるとの意見が多く出された。

最後に、主催された 大分大学 教育福祉科



学部の大岩幸太郎氏より ICT を取り巻く環境は、大分県の状況をみると、他県に比べ厳しい現状があり、その中で、情報教育をイノベートしていく人を育成していくためにも、このような研究会に積極的に参加される先生方を中心として、大分県の情報教育が少しでもイノベートされ、それが大分県を中心とした児童・生徒達の勉強を通して、豊かな生活や人間性につながっていけばと願っていると話され、基本的には、ICT の活用や情報教育をどのように行うことが正しいのか、まだ、答えがなく、道具の使い方の問題点など、容易に解のある問題ではない。日本の国の成り立ちを考える中で、21 世紀がグローバル競争社会であり、知識基盤社会であることも考えると、教員が小学校、中学校、高等学校の頃から ICT を活用している姿を子どもたちにみせることが、21 世紀を担っていく子どもたちにとっても、良い意味での刺激にもなるのではないかと思う。現在でも子どもたちは、ケータイを使いこなしているが、このような情報ツールを正しく使いこなすのがあたりまえになっていくことが望ましいのではないか。予算の許す限り、このような会を開催していきたいとの考えが示された。

(鳥居 隆司 椋山女学園大学・CIEC)